藤原宮
朝堂院朝庭の調査

飛鳥藤原第174次調査　現地説明会資料
（独）国立文化財機構奈良文化財研究所　都城発掘調査部

発掘調査区全景（北東から）

奈良文化財研究所都城発掘調査部では、2008年度以降、藤原宮朝堂院朝庭の整備状況や藤原宮造営過程の全容解明にむけた調査に取り組んでいます。今回の調査地は朝堂院東北部の朝庭部分にあたります（図1）。

これまでの調査で、朝庭は礫を敷きつめて整備されており、この礫敷広場には排水用の暗渠などが設けられていることが判明しています。また、礫敷広場の下層には、藤原宮造営時の遺構（先行条坊・運河・溝・柱穴など）の存在が知られており、昨年の第169次調査では、広場の下層ではじめて掘立柱建物をまとまって検出しました。

今回の調査は2012年4月から開始し、現在も継続しています。調査面積1850㎡のうち、300㎡は既調査区との重複部分です。

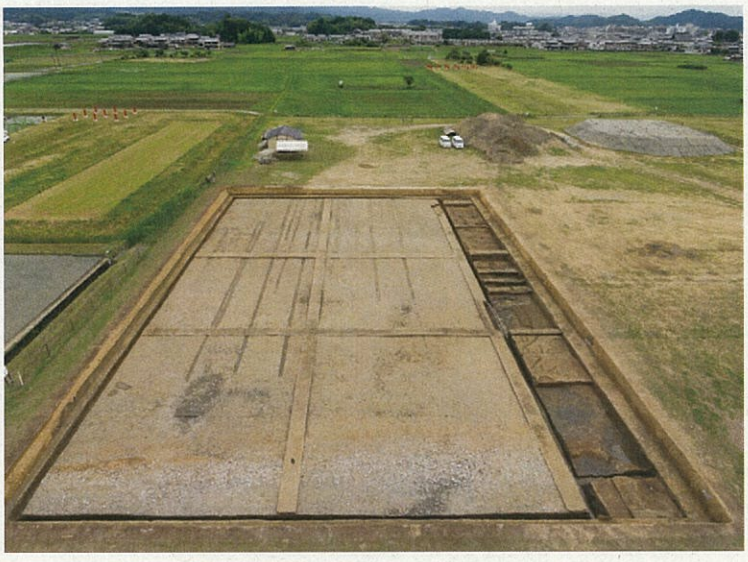
今回の調査では、これまでの調査成果と同様に、朝堂院朝庭が最終的に礫を敷きつめて整備されている状況を確認しました。本調査区では、朝庭中央部で確認された石詰暗渠などは設けられておらず、藤原宮期の遺構は他に確認されておりません。

調査区南部では礫敷を除去し、下層の調査を実施しました。礫敷広場の下層では朝堂院造営に先立ち大規模な整地工事を実施しています。その整地土の中から建物、溝、土坑などを検出しました。また、調査区北辺では木屑が広範囲に広がっていることが明らかになりました。木屑は木材加工時の木片や削り屑と考えられます。

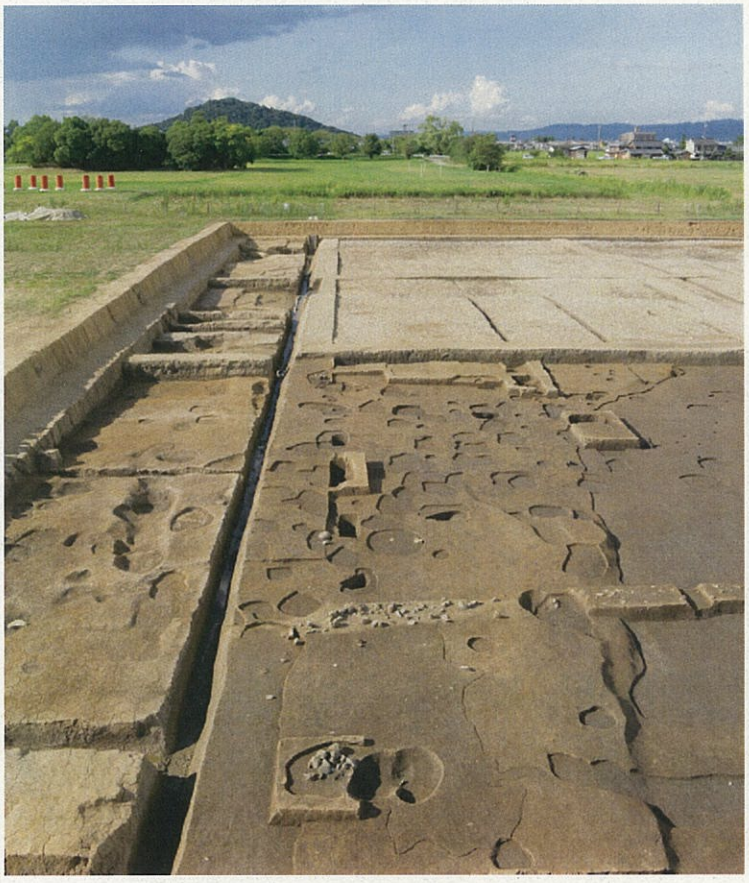
検出した建物は、昨年の第169次調査で検出した建物と一連のもので、宮中枢部の造営に関わる建物群と考えられます。木材加工時の木屑、土坑や木屑だまりから出土した軒瓦、土器なども宮造営の際に廃棄されたものと考えられます。宮造営期におけるこの場所の土地利用の様相が明らかになりました。

さらに下層には朝堂院の東北部に大規模な沼状遺構が存在していました。今回の調査ではその南端を確認し、沼状遺構の南北規模が50m程度であることを確認しました。ただし、この遺構の性格については不明です。

今回の調査では、礫敷広場の範囲や状況を確認し、朝堂院東北部における藤原宮造営期の様相や沼状遺構の規模を明らかにしました。調査は現在も継続中です。今後の調査の過程で、さらに研究を深めていく予定です。



礫敷広場の検出状況　（北から）



礫敷広場下層の掘立柱建物　（南から）

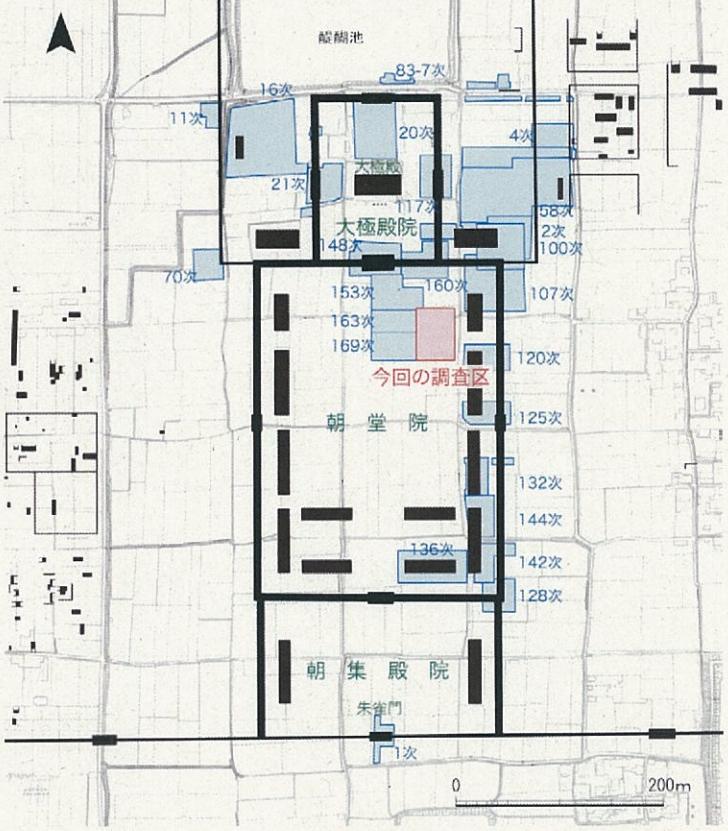


図１　調査区位置図

通路状遺構の軒瓦

礫敷の検出状況

土坑に廃棄された軒瓦

木屑の堆積状況

独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所 都城発掘調査部
〒 634-0025 奈良県橿原市木之本町 94-1　asuka@nabunken.go.jp